

氏 名	小 南 悠
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（文学）
学 位 記 番 号	甲文第206号（文部科学省への報告番号甲第754号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2022年3月16日
学 位 論 文 題 目	The Rhetoric of Textual Flaws: A Study of Herman Melville's Writings（欠陥の修辞学—ハーマン・メルヴィルの作品研究）
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 橋 本 安 央 （副査） 教 授 西 山 けい子 舌 津 智 之（立教大学文学部教授）

論 文 内 容 の 要 旨

19世紀アメリカの作家・詩人ハーマン・メルヴィル（Herman Melville, 1819-1891）は、難解な作風のために同時代の批評家にはさして評価されなかったが、没後30年を経た1920年代に再評価の気運が高まって以降、現在では文学史上もっとも重要な一人と見なされている。他方でその文学世界は、統語的にはしばしば複雑な表現や破綻した文体が用いられ、内容的にもさまざまに整合性がとれない矛盾、歴史的事実との齟齬が見受けられることから、ときに読み手を困惑させてきた。批評史的に言えば、それらは有機的統一を重んずる新批評的文脈において文学的欠陥と見なされたり、一気呵成に原稿を仕上げることを慣わしとしていた作者による単純な取り違え、あるいは転写、校正の際の間違いや見落としとして受け流されたりする傾向にあったといえる。小南悠氏の博士学位請求論文“The Rhetoric of Textual Flaws: A Study of Herman Melville's Writings”は、これらの「欠陥」が作者の制御が比較的及びやすい短篇作品においてですら見受けられる点、および作品内で展開されるフィクション論を踏まえた上で、作品内の秩序を突き崩すかのごときこれら細部を作者による意図的な修辞上の戦略として読み替えることで、新たな作家像を構築せんとする試みである。本論文は序章、時系列に沿った全6章からなる作品論、および結論によって構成されている。

メルヴィル文学における誤謬や文体をめぐる先行研究を概観する序章を受けて、第1章は南太平洋の絶島を舞台とする *Typee*（1846）をめぐる、刊行当時のいくつかの版に収められていた、作者の手による地図にある誤謬を手がかりとする。島の東部に位置するふたつの溪谷が、この地図上では西海岸付近に記載されているのだが、本章はそれが作者による意図的な書き替えであることを立証した上で、物語における冒険の営みが、19世紀アメリカの北米大陸における拡張主義的西漸運動の陰画であるさまを跡づけている。さらに空白の空間を分割、占有するイデオロギー上の地図の機能を踏まえ、タイピー族の皮膚に彫られる刺青が地図に用いられる修辞で紡がれることを看破したのちに、タイピー族が主人公の顔に刺青を彫り込まんとする営みを、西洋白人に対する反植民地主義的転覆行為の象徴として論じている。

Moby-Dick（1851）を取り上げる第2章では、作中にて幾度も言及される帽子の表象が議論の俎上に載せられる。本章は帽子がエイハブの内面を象っており、かつエイハブ自身が帽子化するかのごとき修辞で描写される点に注目する。結末間近の第130章において、帽子を鷹に奪われることが、エイハブのきたるべき破壊を予示するのだが、エイハブは第132章以降、何事もなかったかのごとくこの帽子をかぶり続ける。小説作法上奇妙としかいいようのない矛盾であるが、本章は鷹に奪われた帽子がのちに海上に落下するであろう

運動性の予感が、その後白鯨と対峙して海の藻屑と化すエイハブ、および海中に沈みゆくピーコッド号の姿において実現する、サブリミナルな連想効果をもたらす予型論的な修辞の手法を浮き彫りにしている。

第3章で展開される *Pierre* (1852) 論は、生と死の両義性を含意するワインおよび葡萄の表象を、キリスト教信仰との関連において分析し、イザベルという異教徒的な黒い女性像を疎外する聖なる赤が、キリスト教の排他性と欺瞞を逆照射するという物語の転覆性を論じている。作品後半において、語り手は禁酒主義者キュロス大王の碑文を創作し、史実とは異なりキュロスをワイン鯨飲家として引き合いに出す。本章はバビロン捕囚にあったユダヤ人を解放したキュロスに、暗黒に生きるイザベルを解放せんとするピエールの隠喩を読み取ったのち、聖なるワインを捨てて禁酒主義者と化したピエールがそれを遂行できず、かつキリスト教世界から離反し破滅する他ないアイロニーを、この歴史改変手続きから導き出している。

第4章は虚構の群島を舞台とする “*The Encantadas*” (1854) の第8スケッチにおける、沈黙という「音」を聴き取らんとする論考である。この群島では陸海空の生き物たちが発する鳴き声が反響しているが、第8スケッチは音が欠落している点において際立っている。本章はこの沈黙の風景こそが、夫と弟を喪い、おそらくは通りがかった船乗りに陵辱されながらも独りで孤島に生きる他ない、悲劇の女性ウニヤのサウンドスケープであると主張する。作者は各スケッチの冒頭にエピグラフを置き、それぞれの主題を暗示するのだが、その際主題にあわせて引用の原文を自在に書き替えている。第8スケッチのエピグラフは、叙事詩 *The Faerie Queene* (1590, 1596) から引かれているが、既婚者ウニヤにふさわしく、セイレーンを示唆する「乙女」が「女」に変更される一方で、セイレーンが「声高に」歌う箇所には修正は施されていない。この無修正を作者の意図と解する本章は、エピグラフで「声高に」叫ぶ「女」の姿に、声を篡奪されたウニヤの心の陰画を読み取っている。

回想形式で紡がれる “*The Piazza*” (1856) の修辞法を論じる第5章は、語り手がたびたび詩人に言及し、かつ詩的技法を意図的に用いている点を、議論の前提として確認する。その上で、見る／語る特権性に対する語り手の自意識を、ときに破格の危険を冒してまで反復される一人称代名詞の過剰な使用とその欠落の双方に読み取り、それが逆説的に一人称主体の揺らぎを暗示するさまを分析している。ことは一人称だけではない。たとえば “*It fades it*” といった文におけるそれぞれの三人称代名詞は、その指示対象が交換可能である、すなわち主語と目的語が反転しうる奇妙な表現であり、主体と客体の決定不可能性が示唆されている。このように本章は、特権的な見る／語る主体の存立を相対化するという物語の中心的主題が、語り手の「失文法症」的文体をつうじて語られていることを論証している。

第6章では遺作 *Billy Budd, Sailor* (1924没後出版) の語り手を批判的に読む議論が展開される。“*An Inside Narrative*” という副題をもつこの物語は、冤罪によって処刑された表題人物をめぐる語り手の私的な語り、事件を報告する海軍の公的文書からなっており、先行研究の多くが「内側の物語」である前者を「真実」の語りと見なしてきた。しかしながら本章に拠れば、作中にて歴史的事実を装い言及される事柄には、伝記的に見れば作者が当然知っているにもかかわらず、事実と齟齬する内容が含まれている。かつ留保表現や仮定法の文体も極端に多用される。かくして語り手の語りもまた「外側の物語」なのであり、アポリアとしての「真実」探求こそが物語の真の主題であるということになる。それが信頼できない語り手を造形した作者の隠された戦略的修辞によって紡がれているとする本章は、語りの問題に取り組み続けたメルヴィルが、19世紀後半において、こうしたポストモダニズムの問題意識を先取りしていたと主張している。

本論文は最後の結論において、文学における一貫性を重視してきた西洋修辞学史の伝統を概観したのち、そこから逸脱し、非一貫性を貫くメルヴィルの執筆手法のアレゴリーとして、短篇作品 “*The Bell-Tower*” (1855) を読み解くことで閉じられる。

論文審査結果の要旨

本論文は従来作者による過誤とされてきたさまざまな「欠陥」を、修辞上の意図的な戦略と読み替え、それらが作品の中心的主題との関わりにおいて果たす機能を積極的に検討することで、メルヴィルの修辞学を再評価せんとするものである。散文作品に限定されてはいるが、初期のベストセラー作品から中期の代表作、後期の中短篇作品に至るまで、包括的にこの主題を論じた先行研究は日米を問わず存在しないという点で、きわめて独創的な論考であるといえる。各論においては実証的な分析が施され、説得力のある斬新な議論が展開されている。この意味で、メルヴィル研究史に新たな一石を投ずる、学術上意義のある研究であると判断できる。流暢な英語表現を用いて丁寧に立論している点も、特筆に値する。

テキストの具体的な裂け目を手がかりとして、論理を積み重ねながら施される本論文の個々の解釈には、独創的、示唆的といえるものが数多くあり、おおいに評価することができる。議論の枠組みについていえば、伝記的理解を共通基盤としつつ、審美的、政治学的、歴史学的、文体論的等、章によってさまざまな批評スタイルが採用されており、軸足が定まらないとの印象をもたらし懸念がある反面、小南氏の視野の広さと多能の程が窺われる。あえていえば、細部の「欠陥」と作品全体の中心的主題がダイナミックに連動するさまを捕捉せんとする本論文のアプローチは、多様な主題を取り込む長篇作品よりも、相対的にいって短篇作品のほうが相性がよいため、本論文が採用している手法が成功している度合いは章によって若干異なっている点が指摘できる。また、メルヴィルが自身の修辞における「欠陥」をどのように捉えていたのか、「欠陥」の修辞学をつうじていったいなにをしようとしたのか、といったメタレベルの視点をいっそう深く追求することで、さらに広い視野に立つことができるであろう。混沌としたメルヴィル文学の中に一定の秩序をみいだすことで構築された新たなメルヴィル像は、韻文作品も議論の射程に入れることで、さらに深まるようにも思われる。

以上のように、本研究には今後さらに検討を要する課題が残されている。しかしながら、これらの指摘は小南氏が今後さらなる高みを目指して研究を継続していく際の、ひとつの道標であるといつてよい。深遠な古典的文学者をめぐり、重厚かつ難解な多数の作品群を丁寧に精読し、数多くの先行研究を渉猟、整理した上で、優れた英語表現をつうじて精緻な議論を構築した点、およびメルヴィル研究のみならず、他の文学研究にまで波及効果をもたらす斬新な着眼点に基づき、論理的な考察を着実に展開した点において、本論文が課程博士論文の水準を十二分に満たしていることは間違いない。なお、本論文を構成する全6章の内5章は、それぞれ日米の主要学術雑誌にて査読審査を通過して掲載された、あるいは掲載が決定した、すでに客観的な評価が与えられているものであり、小南氏が学界の次世代を担う若手研究者の一人として将来を嘱望されていることを付記しておく。

本論文審査委員一同は、論文の審査ならびに2022年1月29日に実施した公開発表会と口頭試問の結果から、小南悠氏の論文“The Rhetoric of Textual Flaws: A Study of Herman Melville’s Writings”が「博士(文学)」の学位を授与するに値すると判断し、ここにご報告申し上げます。